

目撃者証言における質問と話し合いの要因に関する研究の概観

北林真樹子 教育学研究科学校教育専攻
守一雄 教育科学講座

1 はじめに

目撃証言の心理学は目撃者の証言や供述がどれほど正確になされるかを研究する心理学の一分野である。そもそも目撃者の証言について検討され始めたのは、過去の裁判において誤判に最も多く寄与した原因が目撃者の誤った識別であったことが挙げられる(Rattner, 1988)。目撃証言によって誤判を招いてしまうことが多いのは、目撃証言が必ずしも正しいとは限らないからである。目撃記憶が変容してしまう要因には、目撃した時の状況や目撃者の体調、また目撃後に目撃者が新たに得た情報によって目撃記憶が変容してしまったこと、犯人に対する偏見など、様々なものがある。それにもかかわらず、法廷では目撃証言にそれ相当の信頼を置いてきた (Ebbesen & Konecni, 1997)。目撃証言研究が盛んなアメリカでは、裁判において判決を下すのは陪審員であるが、その陪審員が実際の目撃の情報よりも目撃証言者の法廷での話しぶりや態度の好ましさ、自信の程度に影響されていたという (Penrod, & Cutler 1995)。実際、アメリカの誤判の第1の原因は誤った証言にあった (Wells, Small, Penrod, Malpass, Fulero & Brimacombe, 1998)。そこで、アメリカにおいて1970年代から目撃証言において陪審員が下す判断をより正確にするにはどうしたらよいかという研究が盛んに行われるようになったのである (Kassin, Ellsworth, & Smith, 1994)。

Kassin, Tubb, Hosch, & Memon(2001)は、目撃証言で研究されてきた諸要因を調査しているが、30項目の要因が挙げられている(表1)。これらを見ると、目撃者の証言には記憶を変容させる要因、証言を行う方法、そして目撃したときの環境の要因が絡んでいることがわかる。もちろんこの30の要因だけが目撃証言に影響する要因ではない。本稿では、Kassin et al. (2001)が要因の一つとして挙げている目撃者に対する質問の影響と、挙げられていない要因である何人かで共同して目撃事態を想起することについて過去に行われてきた研究を概観することを目的とする。これら2つの要因を取り上げる理由としては、目撃証言者の法廷での誤った証言という場面の多くは共同で証言することはほとんどないが、実際には目撃した時点から証言するまでの間に、共同で場面を想起することが行われる可能性が高いためである。またその際にも、質問によって証言を歪めてしまうことが考えられるからである。

論文の検索には心理学関係の論文のデータベースであるPsycINFOを用いた。まず、記憶を個人で想起した場合と共同で想起した場合とを比較した論文を検索するため、PsycINFOにおいて1967年から現在までの範囲を指定し、individual, collaborativeそしてrecallを組み合わせで検索したところ20件がヒットした。続いて、目撃と話し合いとの関係について、1967年から現在に至るまでの範囲でwitnessとdiscussionを組み合わせで検索したところ、88件ヒットし、その中で目撃記憶と話し合いに関係している論文を取り出した。取り出したというのは、目撃証言に関係のない論文が多数見られたからである。しかしさらにキーワードを絞って検索すると、目撃証言に関係ある論文が削除されてしまう恐れがあったため、88件の概要を読んで内容を判断した。そして目撃と質問との関係については、同じくPsycINFOで1967年から現在までの範囲でquestioningとwitnessを組み合わせで検索したところ83件がヒットした。また、posteventでの検索でも168件ヒットした。そこでこれらの中からも目撃と質問に関係している論文を取り出して検討した。また、巖島・仲・原(2003)を参考にした。

表1	目撃証言で研究されてきた諸要因	(Kassin et al., 2001)
1	ストレス	高い水準のストレスは目撃証言の正確さを損なう
2	凶器注目	武器が介入すると、目撃者が犯人の顔を正しく識別する能力が損なわれる
3	ショーアップ	ラインナップによらない単独面通しは誤識別の危険性を高める
4	ラインナップの公平さ	ラインナップの構成員が容疑者に似ているほど、容疑者の識別が正確である確率は高まる
5	ラインナップの教示	警察官の教示で目撃者の識別の意志に影響が出る
6	知覚時間	目撃者が出来事を見る時間が短くなればなるほど、出来事を想起できなくなる
7	忘却曲線	出来事の直後で記憶の忘却が最も大きく、それからは時間の経過とともに徐々に忘却が進む
8	正確さ—確信度	目撃者が識別に自信を持っていても、自身は目撃者の識別の正確さを予測しない
9	事後情報	出来事についての目撃証言は実際に見たことだけではなく、その後を得た情報を反映する
10	色彩知覚	単色光のもとでの色彩の判断は信用できない
11	質問の語法	出来事についての目撃証言は、証人に与えられる質問の語法によって影響を受ける
12	無意識的転移	ときに、目撃者は別の機会にあった人物を、容疑者として識別することがある
13	訓練された観察者	警察官や訓練された観察者は、目撃者として平均的な人物よりも正確であるということはない
14	催眠の正確さ	催眠は目撃者の記憶の報告を増加させる
15	催眠の被暗示性	催眠は誘導や誤導質問への被暗示性を高める
16	期待と態度	目撃者の出来事の知覚や記憶は、目撃者の態度や期待によって影響をうけるかもしれない
17	出来事の凶暴性	目撃者は非暴力的出来事よりも、暴力的な出来事を想起するのが困難である
18	異人種バイアス	目撃者は他人種の成員を識別するよりも自分の人種を識別するのにより正確である
19	確信度の従順性	目撃者の確信度は識別の正確さとは無関係の諸要因によって影響される
20	アルコールの摂取	アルコール摂取は目撃者のその後の人物や出来事の再生を損なう
21	マグショットバイアス	容疑者のマグショットに曝されると後にその容疑者をラインナップから選ぶ確率が高い
22	長期の抑圧	トラウマの経験は何年も抑圧され、その後回復する
23	誤った児童期の記憶	児童期の記憶の回復はしばしば誤っており、また何らかの点で歪んでいる
24	弁別性	正しい記憶と間違った記憶を信頼に足るほどに区分することは可能である
25	子どもの目撃の正確性	目撃者として、若年の子どもは成人ほどには正確でない
26	子どもの被暗示性	若年の子どもは成人に比較して、面接者の暗示、仲間の圧力、社会的影響を受けやすい
27	記述にあったラインナップ	ラインナップの成員が目撃者による容疑者の記述に似ているほど、容疑者の識別は正確になる
28	提示の様式	目撃者は同時提示のラインナップにおいて、相対判断をすることで誤って識別をしやすい
29	高齢の目撃者	高齢の目撃者は若い成人よりも正確でない
30	識別の速さ	ラインナップを見て識別が速い目撃者は、識別が正確な傾向にある

2 目撃者に対する質問の効果

Loftus & Palmer(1974)は、目撃記憶が事後質問によってどのように変化するか検討している。Loftusらは被験者に交通事故を撮影した映像を提示してから質問に回答するという手続きで実験を行っている。そのとき提示された質問文は「2台の車が(“接触した”の意を含む動詞)したときに車はどのくらいのスピードで走っていましたか?」というものであったが、Loftusらは文中の動詞の部分、接触の程度を5段階に分けて提示した:「接触した(contacted)」から「ぶつかった(hit)」、「突き当たった(bumped)」、「衝突した(collided)」そして「激突した(smashed)」。その結果、映像は全て同じものであったにもかかわらず、被験者が答えた車のスピードの見積もりは、動詞の表現の強さに伴って次第に速くなっていくことが見出された。この結果からLoftusらは、ある出来事を目撃した場合には出来事そのものからの情報とその後提示される外的な情報が目撃者の記憶の中で入り組んでしまい、どちらから得られた情報か分からなくなってしまっていて証言に影響を及ぼしたとしている。このように目撃者に対し、目撃事態についての質問をすることによって、証言では実際に目撃した状況と異なることを報告してしまうことがわかる。また、Loftus & Zanni(1975)は、ある出来事について目撃した場合に、そのことについて言葉で言い表すことによって、後により正確に思い出す可能性が高められることを示唆した。Loftusら(1975)は、被験者に1台の車が停止標識で止まり損ねて右折をし、交通量の多い通りにでてしまったところ、大通りを走っていた車が衝突を避けようとして急停車し、5台が関係する玉突き事故を引き起こす結果となった映像を提示した。映像の提示時間は1分間で、うち事故に関する部分はわずか4秒であった。映像提示後、被験者は事故を説明した図を渡され、10項目の質問に回答するように求められた。図の中ではAが停止標識を無視して右折した車で、BからFまでは衝突に巻き込まれた車を表わしていた。10項目の中の1項目で、停止標識を無視した車の

スピードを見積もるという質問項目があった。そこでは被験者の半分には「停止標識」という言葉を用いた質問をしており、残りの半分には「停止標識」の言葉を用いなくて同じ内容の質問をした。言葉がある条件の質問は、(1) A 車が停止標識で止まらずに、走っていったときのスピードはどのくらいだったか。というものであった。そして言葉を用いなかった条件の質問では(2) A 車が右折したときのスピードはどのくらいだったか。というものであった。これらを踏まえて第 10 番目の質問では、すべての被験者に同じ質問を行った。すなわち被験者が停止標識を見たかどうかという質問であった。結果は、この質問に対して、(1) の「停止標識」の言葉が含まれていた質問項目に回答した条件の被験者は 53% が停止標識を「見た」と回答していた。しかし「停止標識」の言葉が含まれていなかった条件の被験者は 35% しか停止標識を「見た」と答えなかった。このことは、実際に存在していたものについて言葉で言い表すことで、そのものが後になって思い出される可能性を高めることができることを示している。つまり目撃者が目撃していた光景を言葉で表し、質問することによってより正確に記憶に定着させることができたと言える。

ある出来事を目撃してから、目撃証言者に対しての質問によって目撃証言および、証言者の自信に影響を与えることを検討した研究は数多くなされてきている (Bowers & Bekarian, 1984; Dunning & Stern, 1994; Kebbell, Rebecca, & Graham 1999; Kebbell, Hatton, & Johnson, 2001; Koehnken & Brockmann, 1987; Kroll, Ogawa, & Nieters, 1988; Lipscomb, Bregman, & McAllister, 1985; McAllister, Bregman, & Lipscomb, 1988; McCloskey & Zaragoza, 1985; Morris & Morris, 1985; Okamoto & Sugahara, 1986; Wagenaar & Boer, 1987; Ward & Loftus, 1985; Zaragoza, McCloskey, & Jamis, 1987)。以下では、特に重要と考えられるものを紹介する。

Kebbell & Giles (2000) は、法廷などでの目撃者の証言の正確さが、質問の形式によって変化すること示した。Kebbell & Giles は、被験者に映像の内容を注意して見るように教示してから、被験者に女性が男性に襲われるという犯罪場面の 5 分間の映像を提示した。そして 1 週間後に質問紙を用いて被験者に質問を行った。質問は複雑条件とシンプル条件とがあり、全体で被験者を半分に分け、半分を複雑条件、残りの半分をシンプル条件に割り当てた。複雑条件では、文法における否定形をひとつ組み込んだ単否定での質問、否定形を二つ組み込んだ二重否定での質問、専門用語を用いた質問、複雑な構文を用いた質問、そして答えを予測することが困難な質問の 5 水準を設けた。複雑条件とシンプル条件では、質問内容は言い回しが異なるだけで、内容も提示順序も同じものであった。そしてそれと同時に被験者は、各質問に対する自分の回答における自信度の評定も行った。結果は複雑条件での質問においては、シンプル条件での質問と比較して目撃者の証言の正確さが減少したことが示された。また自信度と正確さの相関に関しても複雑条件よりもシンプル条件の方が高いことが示された。

さらに、Kebbell & Johnson (2000) は、上記の実験に加えて、目撃証言の正確さにおける弁護士からの質問の影響を検討している。Kebbell & Johnson は上記の実験での複雑条件における 5 水準の質問に加えて、複数 (2 つの質問と 2 つの回答) の答えを含んでいる質問、という 6 水準目を加えて検討を行った。この実験では、被験者への質問を質問紙によってではなく、テープレコーダーで記録をとりながら口頭での質問によって行った。手続きは前実験とほぼ同じで、被験者は「注意しながら見てください。」という教示を受けてから、5 分間の映像を見た。そして 1 週間後に、被験者は映像に関しての口頭による質問に個別に回答した。結果は、前の実験と同じように、複雑条件での質問においては、シンプル条件での質問と比較して目撃者の証言の正確さが減少したことが示された。さらに、自信度と正確さの相関に関しても、前実験と同じ様に複雑条件よりもシンプル条件の方が高いことが示された。これらの結果は、目撃者に同じ内容のことを尋ねたとしても、言い回しが異なるだけで目

撃者の証言が異なってしまうことを示唆している。この実験の結果から考えられることは、目撃者からより正確な情報を得ようとするならば、より要点を明確にした質問をすることが望ましいということであろう。

一方、Shaw & McClure (1996)は、目撃者への質問の影響による、目撃証言者の証言に対する自信の変化を検討している。Shawらは大学の講義において、サクラを用いて講義を20秒間ほど中断させる演技を行った。被験者はその講義を受けていた学生であった。演技の20分後、被験者たちは講義の中断が演技であったことを告げられた。そして質問紙を配布し、サクラの容貌や行動に関する2つの質問に回答するように求められた。そこで被験者は、自身の質問の回答に関しての自信度を7段階で評価するように求められた。これが第1セッションであった。さらに実験は1週間後に第2セッション、2週間後に第3セッション、3週間後に第4セッション、そして4週間後に最終セッションを実施した。各セッションの質問内容はそれぞれのセッションの1週間前のセッションと同じ質問と、新たに加えられた2問の質問で構成されていた。つまり、セッション毎に2問ずつ質問項目が増えて行き、第4週目に行われた最終セッションでは、10個の質問項目に回答したことになる。この実験においては、質問が1週間ごとに増えていくことになり、1週間後のセッションでは、はじめの2問に2問が加わって4問となり、2週間後には6問、3週間後には8問、そして4週間後には10問となったことになる。つまり被験者は最初のセッションで質問された2項目には毎週回答していたことになる。

結果は、同じ質問が繰り返し行われることで、被験者が回答する質問項目に対する自信度が増加することが示された。被験者は初めて回答した質問に対する自信度よりも、2回目のほうが自信度が高くなり、さらに3回目になるとより自信度が高くなった。このようにして5回目の質問まで被験者の質問項目に対する自信度が増加し続けるという結果となった。しかし、ここで注目しておきたいのは、質問が繰り返されるごとに被験者の質問に対する自信度は増加していくのに対して質問に対する回答の正確さには変化が見られなかったということである。このことから、ある出来事を目撃した目撃者が、そのことに関しての質問を繰り返し受けると、その質問に対する自分の回答が正確かどうかには関係なく、その質問に対する自信が過度に増加するということが言える。この点についてShawらは、ある目撃者に対して同じ質問を定期的に繰り返し行うことで、「人為的に」目撃者の自信を膨張させることができるだろうと述べている。また、Shaw, Bjork, & Handal (1995)は、ある出来事を目撃した後に間違った情報のない事後質問がされると後に正しく再生できるとしている。

また、Cassel, Roebbers & Bjoeklund(1996)は、質問の影響が年齢によって変化するか検討している。Casselら(1996)は、幼稚園児、小学2年生、小学4年生そして大人を用いて、正しい答えを示唆するような質問条件、間違った答えを示唆する質問条件および統制条件を用いて実験を行った。手続きは、簡単で覚えやすい映像を提示して1週間後に自由再生を行うというものであった。その結果、幼稚園児は間違った答えを示唆する質問がされたときに、自分の持っている意見を変える現象が大人よりも多く見られたということである。また、この他に、法廷での子どもと被告人との関係（知り合いか他人か）と、その際の質問が示唆的か非示唆的かでどのような影響があるかを検討している研究に、Kalra & Heath(1997)がある。

3 共同での想起と話し合いが目撃証言へ及ぼす影響について

(1) 共同での想起

ある出来事を目撃した場合、その記憶が最も確かなものとなるのはどのようなときだろうか。もちろん出来事を目撃しているその最中に、今まに見ている様子を描写することが最も正確であるとい

える。しかし、目撃証言に関して考えると目撃証言は出来事が起こった後に証言を求められることが大半であるので、時間経過による記憶の変容や忘却を免れることはできない。そこで、目撃した事態をより正確にするためにどうしたらよいかという観点でなされてきた研究がある。Kassin et al. (2001)に挙げられた目撃証言研究で研究されてきた要因には目撃記憶が損なわれたり、証言が歪められたりする要因が主に挙げられている。しかし Kassin et al. (2001)には要因として挙げられていないが、目撃記憶をより正確にするためにどうしたらよいか検討する研究もなされている。それらの中に目撃したことを言葉にして述べること、また複数人で話し合いを行うことで目撃記憶がより正確になるというものが挙げられる。ここからは、話し合いが目撃記憶へもたらす影響を検討した論文を概観する。

記憶の研究では被験者が1人で再生や再認を行うという研究が主として挙げられるが、何人かで共同して思い出すことによってどのような効果が得られるかを検討した研究がある (Alper, Buckhout, Chern, Harwood, & Slomovits, 1976)。目撃の場面へと応用するならば、ある事件を目撃した複数の目撃者どうしが、後に共同で思い出す作業を行う場合が考えられる。

Stephenson, Clark, & Wade(1986)は、4人の場合、2人の場合および1人の場合とで、出来事の再生がどのように異なるか検討している。Stephensonらは、4分43秒間の録音テープで、内容はレイプされたと主張する女性を警察が尋問している様子を材料に用いて、次のような手続きで行った。警察の尋問は18項目から成っていた。被験者は自分が尋問されているつもりでテープを聞くように求められ、後で尋問についてのいくつかの質問が出されると教示された。被験者はテープを聞いた後、5分間の干渉課題を行った。その後、被験者らは4人グループ・2人グループそして1人にランダムに振り分けられ、それぞれのグループごと違う部屋に案内された。その後、被験者らは先ほど聞いた尋問について、後に法廷に立って答えるつもりで思い出すように求められた。個人条件もグループ条件も15分の時間が与えられていたが、グループ条件はグループのメンバー全員で一致した答えを書くように求められていた。その後、被験者らは質問に対する回答の自信度を評定した。ここでも、グループ条件にはメンバーで一致した評定をするように求められた。その結果、自由再生においても手がかり再生においても、正答率は1人条件よりも2人条件、そして4人条件の順で高くなった。さらに1人条件と2人条件の間には有意差があり、また1人条件および2人条件と4人条件の間にも有意差が見られた。しかし自信度については、自由再生においても手がかり再生においても3条件とも目立った差はなく、有意差も見出されなかった。

このほかに、個人と共同での想起の違いを検討している研究には、Basden, Basden, Bryner, & Thomas(1997); Clark, Hori, Putnam, & Martin(2000); Finlay, Hich, & Meudell(2000); Weldon & Bellinger(1997); Weldon, Blair, & Huebsch(2000)がある。

(2) 話し合いが目撃証言へどのように影響するか

Warnick & Sanders(1980)は、目撃証言の正確さに、グループでの話し合いがどのような影響を及ぼすかを検討している。Warnickらは次のような手続きで実験を行った。まず簡単な犯罪場面を映したビデオテープを被験者に提示し、その後被験者に出来事の自由再生、事件の継続時間の推測、犯罪者の身長・体重そして髪の毛の色などを思い出させた。そしてその際に、被験者自身の自信度も同時に評価させた。その後、何分間か経過した後に、6人の顔写真を一連にして提示した映像から、先ほど提示されたビデオの犯罪者を同定するという再認課題を被験者に行わせた。その際自信度も同時に評価させた。実験の手続きは以上のものであるが、Warnickらは被験者を、手続き全てを一人で行う

「個人条件」、グループで話し合いを行ってから質問項目に一人で回答する「グループ・個人条件」、そしてグループで話し合いを行って質問項目への回答も全員一致の回答を示すように求められた「グループ一致条件」の3条件に分けた。実験の結果、個人条件とグループ・個人条件の間には何らの有意差も見出せなかったためにこれらの水準を込みにして個人条件とし、これと比較してグループ一致条件を分析した。その結果、自由再生における全体を通しての間違ひは、グループ一致条件のほうが個人条件よりも有意に少なかった。また、事件の継続時間の推測の正確さもグループ条件のほうが個人条件よりも有意に高かった。これに対して、再認課題においてはグループ条件のほうが個人条件よりもわずかに正確であったが有意には至らなかった。このような結果は Warnick らの研究だけではなく、Rupp, Wormbrand, Karash, & Buckout (1976)の研究においても見られた結果である。

Yarmey(1992)は、ある出来事を経験したときに、その出来事について話し合いを行ったならば、同じ出来事を経験しても話し合いを行わなかったときと比較して、後の再生がより正確になるだろうという仮説を立てて研究を行っている。Yarmey(1992)は目撃証言ではないが、耳から聞いたことを思い出して証言する場合での話し合いの影響を検討した。この研究で Yarmey は、被験者に裕福な家の息子もしくは娘が誘拐されたという想定で、誘拐犯からの電話をテープレコーダーによって被験者に提示した。被験者は後で警察に報告するための報告書を作成しなければならないので、犯人の様子や電話の内容などをよく注意して聞き取るように求められた。被験者は全部で6条件に割り当てられていた。まず、二人で電話についての話し合いを行い、二人がそれぞれの事件に関する意見をまとめた報告書を共同で作成する条件、二人で電話の内容について話し合いは行わず報告書は個人で作成する条件、そして、話し合いは行わないが他の条件で話し合いが行われている間、別の部屋で待機する条件、つまり話し合いを行わない条件の3条件が設定された。さらにこれら3つの条件は、それぞれテープレコーダーを聞いた直後に報告書を作成する条件と、話し合いの直後に報告書を作成するのではなく、48時間後に報告書を作成する条件も設定されていた。

実験の結果は、報告書を作成するタイミングよりも、話し合いの形態による要因の方が、その違いが顕著であった。報告書の作成はいわゆる自由再生にあたるが、その自由再生において、二人で共同の報告書を作成する条件は、他の2つの条件と比較してより報告書の文字数が少なく、さらに、報告書で求められていた犯人の年齢の推測や、電話の時間がどのくらいであったかという推測についてもより正確であった。このことは二人で話し合いをしながら報告書を作成することによって、より簡潔に正しいことを書いていることを示している。一方で、個人で報告書を作成する条件の被験者は報告書に余計な言葉を加えていた。このことは、報告書を作成する際に自分で作り上げた余計な情報まで盛り込んでしまい、かえって報告書の正確さを低めてしまったことが原因として考えられる。この結果は、話し合いの直後に報告書を作成する条件にも、48時間後に報告書を作成する条件にも見られた。また48時間後の遅延再生の場合でも、二人共同で報告書を作成する条件は話し合いをしないで個人で報告書を作成した条件と比較すると、報告書の内容により一貫性があったという結果であった。

この研究の結果では、話し合いを行っただけでは再生成績が良くならなかった。しかし、報告書を作成するという共同の作業を行った際には、2人で報告書を作成することでより再生された情報が簡潔に正しくなったという結果が得られた。このことは、話し合いを行ったもの同士が、話し合いだけではなく互いに再生において何らかの協力をすることで、より記憶が整理されるという効果が期待できることが考えられる。

また Yarmey & Morris(1998)は、目撃証言についても議論をすることによって証言者の記憶が変化することを検討している。Yarmey らは男の単独犯行での銀行強盗を撮影した27秒間の映像を被験者

に提示し、人間の知覚と記憶について話し合いをしてもらう、と被験者に求めることによって目撃記憶への話し合いの影響を検討する実験を行った。被験者は性別からの影響を避けるために全員が女性であった。被験者は、それぞれ4つの条件に割り当てられた。1つ目の条件は二人共同話し合い条件であり、目撃した映像について二人で話し合っ共同の報告書を作成するように求められていた。2つ目の条件は話し合いは行わぬが報告書は一人で作成する条件で、被験者二人で話し合いを行い、それぞれ個別に報告書を作成するように求められた。3つ目の条件は統制条件で、実験の内容とは関係ない話し合いを行う条件である。この条件では二人の被験者は目撃した映像についての話し合いはしないように求められ、代わりに映像とは無関係の話し合いをして、個別に報告書を作成するように求められていた。そして4つ目の条件は話し合いを行わない条件であり、被験者は目撃した映像について話し合いはせず、ひとりで目撃した映像について考え、報告書を作成するように求められていた。またこれら4条件はそれぞれ半分に分けられ、映像提示直後に報告書を作成する条件と、映像提示後1週間の時点で報告書を作成する条件とに分けられていた。

結果は、目撃した事態について話し合いをした条件、つまり報告書を共同で作成する条件と個別に作成する条件は、無関係の話し合いを行った条件と話し合いを行っていない条件と比べて、より再生成績が優れていたという結果が得られた。Yarmey(1992)の結果では話し合いを行って、さらに報告書を共同で作成した場合に再生成績が向上したが、Yarmeyら(1998)では、話し合いを行っただけでも再生成績が向上したことになる。またこの実験では、Yarmey(1992)の実験と比較すると、遅延再生に違いが見られた。犯罪の映像を見た直後に話し合いをしてから報告書を作成した条件は、映像を見た直後に話し合いを行い、その1週間後に報告書を作成した条件と比較して、より犯人像の再生が正確であった。この実験ではYarmey(1992)の実験では見られなかった、直後再生と遅延再生との間に差が見られたということになる。この違いが生じた理由としては、遅延再生までの時間の差が大きく異なるということが考えられる。Yarmey(1992)の実験では遅延時間は48時間であったが、この実験では遅延時間は1週間であった。このことから、ある物事を目撃してからそれを再生するまでの時間がより長くなると、それを再生したときには正確さが低くなるということがわかる。

目撃後の話し合いが記憶の正確さを必ず促進するわけではないという結果が得られた研究も見られる。Underwood & Milton (1993)は、ある交通事故を撮影した映像を被験者に提示して、その後話し合いを行う条件と行わない条件とで、記憶の正確さにどのような影響を及ぼすか検討している。Underwoodらは、映像を提示するにあたって被験者を2×2の4つの条件に分けた。まず、映像を提示する前に「これから自動車の事故を映した映像を提示します。」と被験者にどのような内容の映像を提示するか知らせる条件と、どのような映像を提示するか知らせない条件があった。そして、それぞれの条件をさらに2つの条件に分けた。一つは、映像提示後に映像で見た自動車事故について話し合いを行ってから、質問紙に回答する条件であり、もう一つは映像提示後に話し合いを行わぬで質問紙に回答する条件であった。

結果は、映像提示前に自動車事故についての映像であるとあらかじめ教示されていた条件において、映像提示後に話し合いを行った下位条件では、行わぬ下位条件と比較して、成績が上回っていた。しかし、自動車事故の映像を提示するという教示のなかった条件においては、グループで話し合いを行った条件と行わぬ下位条件で再生の正確さにおける差は見られなかった。

自動車事故は、通常的生活場面においては予期することが困難な事態である。この実験では被験者は自動車事故についての映像を見るとあらかじめ教示されて、その後グループで話し合いを行った場合に記憶の正確さが上昇したという結果が得られた。しかし、あらかじめどのような映像を見るか教

示されなかった場合は、グループで話し合いを行ってから質問に回答した場合と、個人で話し合いなしで質問に答えた場合とで差はなかった。つまり、この研究からは、あらかじめ予測のつく事態に対しては話し合いを行うことで記憶の正確さが増すが、そうでない場合にはこのような影響はないということが言える。この結果から、Underwoodらは、不測の事態を目撃してその後話し合いをすることはそれを思い出したときの正確さに影響を及ぼさないであろうと述べている。

では、あらかじめ情報が得られなかったにせよ、なぜこのように目撃後に話し合いを行うことが、その後の成績に影響を及ぼさなかったのであろうか。このような結果となった理由としては、このUnderwoodらの研究では記憶の正確さを確認する方法が、報告書を作成するといった自由再生形式ではなく、質問紙に回答するという再認に近い方法であったことが考えられる。つまり自由再生である、話し合いを行うことによって互いの情報をより多く集めて検討することができる。しかしある質問に回答するような再認の形式であると、集団で話し合うことによって多くの情報を集めることができるというメリットが、質問に回答するだけという狭い範囲になってしまうことによって発揮しにくくなるということが考えられる。すなわち、話し合いが目撃記憶に与える影響については、自由再生の場面ではよりよく影響するが、再認の場面ではあまり影響はないと考えることができるのである。このような、再認課題では必ずしも集団での話し合いの効果が見られなかったという結果は、前に挙げたWarnick & Sanders(1980)の研究においても見られたことである。この他に、話し合いが目撃証言へ及ぼす影響を研究している論文にはHollin & Clifford(1983)などがある。

4 話し合いがもたらす食い違いが目撃記憶および目撃証言へ及ぼす影響について

同一状況を目撃した他者と話し合いをした場合、目撃者同士は見たものを互いに確認しあうことがある。しかしこのような話し合い場面で見間違いがあった場合は、目撃者同士の話が食い違うことになる。食い違いは偶然生じるものであり、実験場面で作り出すことは難しい。サクラを用いて意見の食い違いを引き起こす方法もあるが、その場合被験者が疑いを持つ可能性がある。しかし、兼松(1992)は、スライドプロジェクタ2台と偏光ガラスを組み合わせることによって、2人の被験者がそれぞれ異なる映像を見ているのだが、被験者はそれに気付かない状況を作り出すことに成功した(MORI テクニック, Mori, 2003)。そして兼松・守・守(1996)は実験的に2人の被験者に意見の食い違いを生じさせ、被験者どうし意見の食い違ったままで行われる話し合いが記憶変容に及ぼす影響を研究した。実験では、話し合いを行うだけで報告書は個人で作成する個人条件と、話し合いを行って2人で共通の報告書を作成する共同条件とを設けて記憶の変容を検討している。この結果は、被験者どうし食い違う映像を見ていたという点を除けば、Yarmey(1992)と同じように、個人条件よりも共同条件の方が、報告書の正確さは増していた。しかし共同で報告書を作成した結果、全体的に報告書の正確さが増したとしても、見間違いを生じさせている項目については実際に被験者が見ていない項目まで相手の意見を自分の記憶に取り入れ、定着させていた。兼松はこの理由として、相手の意見を自分の意見と思い込んでいる場合と、相手の意見と認識しつつ記入している場合の2点を挙げている。

兼松ら(1996)の追試を行った山口(1997)の研究では、兼松ら(1996)の映像における問題点を改善し、光量を大きく、映像を鮮明にして実験を行った。その結果、共通見解を作りその後相手の意見を取り入れて自分の記憶に定着させるという同調率は兼松ら(1997)に比べて低かったが、話し合いを通して目撃者同士が互いの記憶を補い合い、最終的に出来事の全体像に近い記憶を持つことが見出された。同調が低く抑えられた理由として山口(1997)は、兼松ら(1996)よりもより明確な映像を提示したことによって被験者は自分の意見に自信を持ち、話し合いを通して共通見解を作成してもそれは一時的な

ものと捉えられ、1週間後まで保持することが困難であったことを理由として挙げている。

続く山崎(2002)の研究では、兼松ら(1996)、山口(1997)らの提示映像が8mmビデオで撮影された不鮮明なものであること、そして実写映像であるために完全には二つの映像が重ならないことなどの問題を解消するために、提示映像にアニメーションを用いて、さらにプロジェクタの光量も大きくして映像を提示した。また同時に映像を見る被験者の数も、2人条件と3人条件とを設けて検討している。結果は、目撃する人数に関係なく話し合いによって再生成績は向上していることが明らかになった。そして話し合いで共通見解を作る場合、3人条件で多数決やゲーム的なものを用いた場合よりも2人条件で話し合いによって共通見解を作る方が1週間後までその共通見解を保持し続けることが出来たことが示された。さらに映像がアニメーションであると実写映像よりも再生成績は向上するが、共通見解を保持することが困難であることも見出された。この結果から山口(1997)の結果と同様に、被験者はより鮮明な映像が提示されたために自分の意見に自信を持ち、相手の意見を取り入れにくかったことが考えられる。

堀口(2003)は、兼松ら(1996)、山口(1997)、山崎(2002)の提示映像の問題点をさらに改善し、デジタルカメラで撮影した鮮明かつ情報量の多い刺激映像を用いた。また異なる映像のタイミングを合わせるためにデジタル処理を行って、ずれが生じないようにした。また異なる映像を2パターン作り、映像の異なり具合が以前の実験と同じものと、大きく異なるものの2水準を設けて実験を行った。さらに実験では、被験者同士が話し合いを通じて情報の食い違いをどのように処理するかを詳細に検討するため、話し合いの後に話し合いについて実験者がインタビューを行った。結果は、兼松ら(1996)、山口(1997)、山崎(2002)とは異なり話し合いによる再生成績の向上は見られなかった。この理由について堀口(2003)は再生率の全体的な高さから天井効果が起こり、実験で用いた指標では検出できなかったことを理由として挙げている。また堀口(2003)は、山口(1997)、山崎(2002)の研究結果とあわせて検討した結果、映像が実写であろうとアニメーションであろうと、鮮明であるならば再生率は向上するとしている。しかし、自信度評定では話し合い後自信度の評価が上がったことから、再生成績には反映されなかったが記憶の質的な向上があったのではないかとしている。また、映像がそれまでの研究よりも鮮明であり記憶しやすかったことも理由として挙げている。そして映像の違いの度合いについては、違いの度合いの大きい条件の方が再生率は低いことを見出した。また話し合いの様子からは、2人で共同して正解に近づこうという意識よりも、対人関係を良好に保つために意見の統一が形式的になされていることが観察されたということである。

5 まとめ

話し合いによる目撃証言への影響の研究を見てきたところ、全体的に話し合いによって目撃記憶がより正確になるということが分かった。しかしさらに細かく見ると、複数人で話し合いをしてから、報告書を1人で作成する場合よりも、共同で報告書を作成する方がより正確な内容になっていたという場合が少なからず見られることが分かる(Yarmey, 1992; 兼松ら, 1996)。この現象を実際の事件・事故の目撃証言に応用するならば、複数の目撃者が存在する場合には、共同で報告させることでより出来事の全体像に近い報告が可能となることが考えられる。しかし兼松ら(1996)のように、見間違いを起こしていた場合には、共同報告によって相手の意見を取り入れて自分が見たものとは異なる記憶を形成してしまう恐れもあるので、見間違いが生じやすい状況(夜間、悪天候)での目撃証言については話し合いのみに留めるほうが良いと言える。一方で本稿では質問の影響についても概観してきたが、あいまいな質問や分かりにくい質問、また間違った情報を含んだ質問によって目撃証言が不正確

になるという研究が多く見られた。このことから、話し合いを求める際にも出来るだけ目撃者の記憶を歪めないよう、質問には注意することが必要であると言える。

6 おわりに

本稿では主として目撃証言者に対する事後質問、話し合いの効果について過去 30 年間の論文を概観した。本稿では詳しく紹介できなかった研究も多数あるが、これらの研究も含めて全体として言えることは、目撃証言にはあまりにも多くの要因が関わっているために、個々の研究ごとにばらばらな結果になりがちだということである。たとえば、一つの実験研究では要因計画が複雑になりすぎてしまうため、どうしても結果はクリアなものにならない。さらには、個々の研究者ごとに異なる要因に焦点が当てられるために、関連する実験結果間でも一貫した結論となりにくい。このことから目撃証言について研究する際には、どのような要因について検討したいか焦点を絞って研究することとともに多くの研究者が共同で実験研究を行う必要もあると思われる。そしてさらには、Loftus に始まる実験研究パラダイムを超える方法論的ブレイクスルーも必要である。そうした中で、守らの研究グループが開発した新しい研究手法(Mori, 2003)は大いに期待されるものであると思う。

7 文献

- Alper, A., Buckhout, R., Chern, S., Harwood, R., & Slomovits, M. 1976 Eyewitness identification: Accuracy of individual vs. composite recollections of a crime. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 8(2), 147-149.
- Basden, B. H., Basden, D. R., Bryner, S., & Tomas III, R. L. 1997 A Comparison of Group and Individual Remembering: Does Collaboration Disrupt Retrieval Strategies? *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 23(5), 1176-1189.
- Bowers, J. M., & Bekerian, D. A. 1984 When will postevent information distort eyewitness testimony? *Journal of Applied Psychology*, 69(3), 466-472.
- Cassel, W. S., Roebbers, C. M. E., & Bjoeklund, D. F. 1996 Developmental patterns of eyewitness responses to repeated and increasingly suggestive questions. *Journal of Experimental Child Psychology*, 61(2), 116-133.
- Clark, S. E., Hori, A., Putnam, A., & Martin, T. P. 2000 Group Collaboration in Recognition Memory. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 26(6) 1578-1588.
- Dunning, D., & Stern, L. B. 1994 Distinguishing Accurate From Inaccurate Eyewitness Identification via Inquiries About decision Processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67(5), 818-835.
- Ebbesen, E. B., & Konecni, V. J. (1997). Eyewitness memory research: Probative v. prejudicial value. *Expert Evidence*, 5 (1 & 2), 2-28.
- Finlay, F., Hitch, G. J., & Meudell, P. R. 2000 Mutual inhibition in collaborative recall: Evidence for a retrieval-based account. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 26(6), 1556-1567.
- 堀口直子 2003 異なる事態を目撃した目撃者間の「話し合い」による意見変容過程. 信州大学教育学部卒業論文.
- Hollin, C. R., & Clifford, B. R. 1983 Eyewitness Testimony: The Effects of Discussion on Recall Accuracy and Agreement. *Journal of Applied Social Psychology*, 13(3), 234-244.
- Kalra, B., & Heath, W. P. 1997 Perceptions of a child as witness: effects of leading questions and the type of relationship between child and defendant. *Psychological Reports*, 80(3, Pt1), 979-986.
- 兼松仁 1992 目撃者の記憶—記憶の話し合いが目撃者の証言に及ぼす影響についての研究— 信州大学教育学部卒業論文
- 兼松仁・守一雄・守秀子 1996 異なる事態を目撃した2人の目撃者の話し合いによる記憶の変容 認知科学, 3(1), 29-40.

- Kassin, S. M., Ellsworth, P. C., & Smith, V. L. 1994 Deja vu all over again: Elliott's critique of eyewitness experts. *Law and Human Behavior*, 18(2), 203-210.
- Kassin, S. M., Tubb, V. A., Hosch, H. M., & Memon, A. 2001 On the "General acceptance" of eyewitness testimony research. *American Psychologist*, 56, 405-416.
- Kebbell, M. R., & Giles, D. C. 2000 Some experimental influences of lawyers' complicated questions on eyewitness confidence and accuracy. *Journal of Psychology*, 134(2), 129-139.
- Kebbell, M. R., Hatton, C., & Johnson, S. D. 2001 People with Learning disabilities as witness in court: What questions should lawyers ask? *British Journal of Learning Disabilities*, 29(3), 98-102.
- Kebbell, M. R., & Johnson, S. D. 2000 Lawyers' questioning: The effect of confusing questions on witness confidence and accuracy. *Law and Human Behavior*, 24(6), 629-641.
- Kebbell, M. R., Rebecca, M., & Graham, W. F. 1999 The cognitive interview: A survey of its forensic effectiveness. *Psychology, Crime and Law*, 5(1-2), 101-115.
- Koehnken, G., & Brockmann, C. 1987 Unspecific postevent information, attribution of responsibility, and eyewitness performance. *Applied Cognitive Psychology*, 1(3), 197-207.
- Kroll, N. E., Ogawa, K. H., & Nieters, J. E. 1988 Eyewitness memory and the importance of sequential information. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 26(5), 395-398.
- Lipscomb, T. J., Bregman, N. J., & McAllister, H. A. 1985 A developmental inquiry into the effects of postevent information on eyewitness accounts. *Journal of Genetic Psychology*, 146(4), 551-556.
- Loftus, E. F., & Zanni, G. 1975 Eyewitness testimony: the influence of the wording of a question. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 5, 86-88.
- Loftus, E. F., & Palmer, J. C. 1974 Recognition of automobile destruction: an example of the interaction between language and memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 13, 585-589.
- McAllister, H. A., Bregman, N. J., & Lipscomb, T. J. 1988 Speed estimates by eyewitnesses and earwitnesses: How vulnerable to postevent information? *Journal of General Psychology*, 115(1), 25-35.
- McCloskey, M., & Zaragoza, M. 1985 Misleading postevent information and memory for events: Arguments and evidence against memory impairment hypotheses. *Journal of Experimental Psychology: General*, 114(1), 1-16.
- Mori, K. 2003 Surreptitiously projecting a different movie to two subsets of viewers. *Behavior Research Methods, Instruments, and Computers*, forthcoming.
- Morris, V., & Morris, P. E. 1985 The influence of question order on eyewitness accuracy. *British Journal of Psychology*, 76, 365-371.
- Okamoto, S., & Sugahara, Y. 1986 Effects of postevent information on eyewitness testimony. *Japanese Psychological Research*, 28(4), 196-201.
- Penrod, S., & Cutler, B. 1995 Witness confidence and witness accuracy: Assessing their forensic relation. *Psychology, Public Policy, and Law*, 1(4), 817-845.
- Rattner, A. 1988 Convicted but innocent: Wrongful conviction and the criminal justice system. *Law and Human Behavior*, 12, 283-293.
- Rupp, A., Warmbrand, A., & Buckout, R. 1976 Effects of group interaction on eyewitness reports. Paper presented at the meeting of the Eastern Psychological Association, New York City.
- Shaw, J. S. 1996 Increases in eyewitness Confidence Resulting From Postevent Questioning. *Journal of Experimental Psychology: Applied*, 2(2), 126-146.

- Shaw, J. S., & McClure, K. A. 1996 Repeated postevent questioning can lead to elevated levels of eyewitness confidence. *Law and Human Behavior*, 20(6), 629-653.
- Shaw, J. S., Bjork, R. A., & Handal, A. 1995 Retrieval-induced forgetting in an eyewitness-memory paradigm. *Psychonomic Bulletin and Review*, 2(2), 249-253.
- Stephenson, G. M., Clark, N. K., & Wade, G. S. 1986 Meeting Make Evidence? An Experimental Study of Collaborative and Individual Recall of a Simulated Police Interrogation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50(6), 1113-1122.
- Underwood, G., & Milton, H. 1993 Collusion after a collision: Witnesses' reports of a road accident with and without discussion. *Applied Cognitive Psychology*, 7(1), 11-22.
- Wagenaar, W. A., & Boer, J. P. 1987 Misleading postevent information: Testing parameterized models of integration in memory. *Acta Psychologica*, 66(3), 291-306.
- Ward, R. A., & Loftus, E. F. 1985 Eyewitness performance in different psychological types. *Journal of General Psychology*, 112(2), 191-200.
- Warnick, D. H., & Sanders, G. S., 1980 The Effects of Discussion on Eyewitness Accuracy. *Journal of Applied Social Psychology*, 10(3), 249-259.
- Weldon, M. S., & Bellinger, K. D. 1997 Collective Memory: Collaborative and Individual Processes in Remembering. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 23(5), 1160-1175.
- Weldon, M. S. & Blair, C., & Huebsch, P. D. 1997 Group Remembering: Does Social Loafing Underlie Collaborative Inhibition? *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 26(6), 1568-1577.
- Wells, G. L., Small, M., Penrod, S., Malpass, R. S., Fulero, S. M., & Brimacombe, C. A. E. 1998 Eyewitness identification procedure: Recommendation for lineups and photospreads. *Law and Human Behavior*, 22, 603-647.
- 山口美咲 1997 目撃者の記憶変容-変更フィルタを使った実験的「見間違い」パラダイムによる研究- 信州大学教育学部卒業論文
- 山崎茜 2002 異なる事態を目撃した複数の目撃者の記憶変容-アニメーションを用いて- 信州大学教育学部卒業論文
- Yarmey, A. D. 1992 The effects of dyadic discussion on eyewitness recall. *Basic and Applied Social Psychology*, 13(2), 251-263.
- Yarmey, A. D., & Morris, S., 1998 The effects of discussion on eyewitness memory. *Journal of Applied Social Psychology*, 28(17), 1637-1648.
- Zaragoza, M. S., McCloskey, M., & Jamis, M. 1987 Misleading postevent information and recall of the original event: Further evidence against the memory impairment hypothesis. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 13(1), 36-44.

(2003年9月25日 受理)